岡村病院
院内報

歩（あゆみ）

第 58 号

発行　岡村病院
編集　歩(あゆみ)
　　編集委員会
平成22年6月1日

岡村病院 基本理念

私たちは、患者様本位を第一に考え
　高度な専門医療技術をもって
地域社会に貢献することを目指します。

「Tシャツアート展」（黒潮町入野海岸）
宮地　キミ 様　撮影

今月のことば

「問題は実行ですよ」

ブラジルで農産組合の育成に尽力された中澤源一郎氏（現香南市出身）の「農協とともに四十年」という本の中に次のような記事があります。

「先達てトマトに関する中々の研究家でよいトマトを作る事において定評のある一組合員に『何か月報にトマトに関する貴下の研究を書いてくれませんか』とお願みした所、『問題は実行ですよ。大概の事は皆知っていますよ』と言うご返事であった。『問題は実行ですよ』。この言葉は深く私の胸を打つものがあった。…この言葉は私には誠によい教訓となった。」

これは何も農業に限った事ではありません。私共も毎日の仕事の中で、或は生活の中で、よいと分かっていても、また、しなければならないと思っていても、実行しないでいる事が沢山あるのではないでしょうか。

知っているだけ、思っているだけでは実も結ばないし、進歩もありません。知る事も大事ですが、今、私共にとってもっと大事なのは、よいと知った事、しなければならないと思った事を実行する勇気だと思います。

「問題は実行ですよ」この言葉をもう一度自分に当てはめて考えてみましょう。

大塚敬節先生に学ぶ

院長 岡村高雄

先日、先輩の先生方と食事をする機会に恵まれました。高知出身の偉大な先生方の話になりました。例えば森田療法（日本で生まれた代表的な神経症の精神療法として知られており、世界20カ国以上で紹介されている。）で有名な森田正馬先生、細菌学の分野で顕著な功績を挙げられ、日本細菌学会にその功績を記念して浅川賞として名を残されている浅川範彦先生等のお名前が挙がった後に、大塚敬節（おおつか・よしのり）先生の話になりました。失礼にも小生はお名前をそれまでお聞きしたことが無く全く無知でしたが、先輩は大塚先生の和歌をご紹介下さいました。「術ありて　後に学あり　術なくて　咲きたる学の　花のはかなさ」と詠まれております。大塚先生は1900年（明治33年）2月25日、修琴堂大塚医院三代目大塚恵迪先生の二男として高知市にお生まれになり、1923年（大正12年）熊本医専を卒業し、父の後を継ぎ内科開業医として高知で6年間過ごされた後、上京されています。その後、1929年（昭和4年）西洋医から漢方医に転じ『皇漢医学』を著した湯本求真先生に師事し、漢方医学を学んだ後に1931年（昭和6年）牛込に漢方専門医院を開業されております。その後、1934年（昭和9年）日本漢方医学会が創設され、月刊『漢方と漢薬』が創刊されるにあたり幹事となられ、1937年（昭和12年）拓殖大学に漢方医学講座が開かれ講師に就任の後、この講座を母体として翌年東亜医学協会が結成され、『東亜医学』を発行されております。1957年（昭和32年）日本東洋医学会理事長に就任。1973年（昭和48年）北里研究所付属東洋医学総合研究所が設置されると、初代所長を務められ、1980年（昭和55年）在職中に80歳で逝去されております。つまり、日本の漢方医学、東洋医学の先駆者として有名な方と初めて知りました。この和歌は牧野植物園に碑として残されている有名な歌であると知りました。

確かにこの歌は現在の医療に対して多くの警鐘を鳴らし、学ぶべきことが多いように思います。現在の医学は往々にして「学」先行型となっています。例えば、文献に書いていた、この有名な先生の意見によるとこの治療が正しい等の話が先行し、「術」が軽視されております。「学」と「術」はいずれも大切と考えますが、古くから受け継がれた経験、個人個人での差、説明しがたい術も大切にしてこれらの中から学ぶべきことも多いと思っています。

それと同時に「術」を鍛え、磨く日々の努力もおろそかにしてはならないと痛感致しました。

再度、大塚先生の歌を記載し終わりに致します。

「術ありて　後に学あり　術なくて
　　咲きたる学の　花のはかなさ」

下肢静脈瘤について

心臓血管外科　医長　西 村 哲 也

下肢静脈瘤は下腿や大腿部の静脈が拡張して、こぶとなり数珠状につらなって見える病気です。症状としては、全く無症状なものから、ふくらはぎが攣りやすい、脚が重だるい、皮膚が黒く色素沈着を起こし、痒みを伴うなどがあります。さらに重症になると、皮膚潰瘍ができ、なかなか治らなく、１年以上も悩まれている方がおられます。これらの症状は、脚に血液がたまって鬱血した状態になるために起きるものです。鬱血の原因は、静脈にある弁の働きが壊れてしまっていることによります。静脈は血液を心臓へ返すための血管で、心臓へ向かう血液の流れを保ち、逆流を防止するための弁を持っています。この弁が壊れてしまうと、血液の逆流を来たし、静脈は拡張してこぶ状になり、脚は逆流した血液で鬱血して前記のような症状を認めるようになります。

女性や立ち仕事の方、肥満の人などにできやすいと言われています。女性の場合は妊娠などがきっかけとなり発症することが多いようです。また立ち仕事の方は、重力の関係上どうしても血液が下がろうとするため、弁に負担がかかり、痛んでしまう事によります。肥満の方は、お腹の脂肪などが静脈を圧迫してしまい、心臓への血液の返りを邪魔してしまうことで弁に負担がかかり痛んでしまう事によります。

治療としては、弾性ストッキングなどを穿いて、下肢を圧迫することにより鬱血を改善し、重だるさなどの症状が改善させることができます。しかし、この方法は補助的または姑息的な治療であり、根本的治療はやはり手術と言うことになります。多くの静脈瘤は大伏在静脈に認められています。

この静脈は足関節内側から鼠径部（太ももの付け根）にかけて走行し、鼠径部で大腿静脈（下肢の静脈血液の大部分が流れ込む太い深部にある静脈）に合流しています。

その合流部に逆流防止弁があり、この弁が痛んで逆流が起こり瘤となっています。この場合の手術は、鼠径部で、この血管を大腿静脈への合流部近くで結紮し、離断することが基本となります。この処置を行った後、この血管を引き抜いてしまう方法、または部分的に切除する方法、または薬物を血管内に注入して固めて潰してしまう方法などが行われています。大伏在静脈を引き抜いてしまう手術方法が主流となっております。以前は全身麻酔または腰椎麻酔（腰から下の麻酔）を行って手術していましたが、最近では局所麻酔と点滴による静脈麻酔で短時間眠っている間に手術を行う方法が行われています。この方法は、静脈麻酔を中止すると直ぐに目が覚め、手術直後から歩くことができ、また術後の疼痛が少ない事が特徴です。ですから、１～２泊の入院あるいは日帰り手術も可能で、以前と比べとても楽になっています。以上のように手術は簡単になってきており、静脈瘤のある方は、我慢して悪化する前に早めに血管外科などを受診されることをお勧めいたします。

患者さまからのお便り

予防医学をめざして

秋澤　孝子

今私は予防医学に精を出しています。考えてみると5年前87歳の夏の終り“タコツボ型心筋症”で病院にかつぎこまれました。その夜、近親の者は病院に泊り、私も自分は死ぬのだと思っていました。けれども神様はそのみ心のままに主治医を通して現代医療の粋を駆使して病と闘い、勝って下さったのです。少しずつ少しずつ身のまわりの事が出来るようになり、それからそれへと段々に出来るようになって、今では食事作り、洗濯と家事をこなし、週3回は教会にも行っております。お天気のよい日は2時間足らず畑もたのしんでいます。

おかげ様で体はどこも不調をおぼえる事もなく、風邪を引かない様に気をつけています。そうです！予防医学を目ざしています。それは夜は8時頃には寝て、朝は5時頃起き、入浴して聖書を読みます。6時から8時40分までラジオの語学を聴きます。英語、ハングル語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、中国語です。唯耳で聴いてすぐ大きな声でまねをするだけです。言葉を通して日常生活、習慣、文化など垣間見る思いがして、若き日夫と共に旅したその土地に、もはや行くお金も、体力もない今、とてもたのしい時間です。

週1回整体で治療をうけ体をほぐしてもらい、2ヶ月に一度病院に行って診療していただき血圧剤をもらっています。おかげ様で心身共に健やかで、一日を丁寧に生きています。

患者さまからのお便り

俳　句

沈丁花咲きて狭庭に春少し
黄蝶を見初めしひと日の仕合せ感
鳥の来てポンカン少しお裾分け
散歩道とりどりの花早春の午後
病友の笑顔に安堵花だより

秋田　依久子

宇宙よりこぼれし吐息流れ星
満月の降りて来そうな古城かな
紅梅や会う事もなし友の陰
朝露の零れぬ程に蓮ゆれて
音もなく動く地球や桜散る

門田　俊一郎

「ぽんかん事件」

看護部長　下山　美知

奇禍に巻き込まれたと言う言葉がある。娘が大阪に住んでいた時“ぽんかん”を送った。ところが取次店の送り状の貼り間違いで誤配送されてしまった。他人様からみれば笑い話だが現実に起こるとするとそれはまさに奇禍である。はるばる郊外まで出かけ買い求めた“ぽんかん”を見知らぬ他人様が食べた。それは仕方ない。しかし、許せないのは大手運送会社の担当者がこともなげに「領収書を送ってくれたら同額の品を送ります」と言ったことだった。

たかが“ぽんかん”にしても、とっかえひっかえ吟味して太鼓判のものを送った。それが親心というものである。それをこともなげに「同額のものを送ります」では情けない。真心を運ぶ宅配便とは空念仏の代名詞かと、私はいつになくボルテージを上げてしまった。例えば、担当者がかつて毒入りの食べ物を食べさせられていれば、代わりの“ぽんかん”を送るなどとは言わなかっただろう。愛娘に思いを込めて贈り物をした事があれば笑っては済まさなかっただろう。私はむなしさで一杯になった。

これが医療の現場であればどうだろう。患者様の取り違えにも相等する出来事ではないだろうか。問題意識の欠如は組織社会では危惧の対象にされる。

まさに他山の石と言える出来事であった。

「めぐりあって」

外来看護師　植野　水貴

今から9年前、仕事にも慣れ、生活に余裕ができてきた頃、ふと思った事は自分には趣味といえるものがない事でした。何か自分に合うものを探していたところ、雑誌に教室紹介があり、そこに一輪の花が生けられておりそれがなんとなく気になり、そのページを切り取ってファイルしていました。それから数ヵ月後、やっぱり気になり、電話してみようと思ったのです。

そして電話してみると、男の人が対応してくれました。事務の人？と思って教室に足を運ぶとその人が先生だったので驚きました。お花の先生＝女の先生という先入観…。扉を開けるとアンティークの家具やソファー、ジャズの流れる空間。自分の思っていた生け花のイメージと全く違っていたのです。生けている花を見てみると、枝もの（例えば桜）にスイートピーを合わせていたり、学生の頃授業で習った生け花と違っていました。

こんなのできるかなと思い不安でした。そんな中、先生が言った一言「センスは磨かれるもの。」が私の不安を和らげてくれました。そしてその言葉は何事にも通じると思います。看護師の仕事を始めた時も不安は沢山ありました。しかし多くの患者様と接する事で、色々な経験をし、看護師としてのセンスも少しずつですが磨かれていると思います。

あれから9年の時が経過し、今では同じ趣味を持った友人も沢山できました。年齢も仕事も違う友人からは自分の知らない分野の事を教えてもらったり、食事や旅行に行ったりと学生の頃の友人とは違うお付き合いが有意義です。

いつもお花の教室には週末に通っています。お花を生け、お茶を楽しみ、友人と語り、リフレッシュして次の週を迎えるのが習慣になっています。これからも何事にも目標を持って自己研鑽していきたいと思っています。

「理学療法に携わって」

理学療法士　木下　ちひろ

今年の1月に入職し早4ヶ月が過ぎ、慣れないながら日々の業務に追われる毎日です。当初は、患者様や職員の顔と名前が一致しなかったり、時間調整や患者様との意思疎通がうまくいかなかったこともありましたが、周囲の助けもあり、業務を行えています。

理学療法士として、患者様に運動療法や電気刺激、温熱、その他物理療法を使用し基本的運動能力の回復を図ることはもちろんですが、患者様の退院後の生活を見据えて、日常生活能力の維持・改善や認知機能の状態の理解や不安感を取り除くような精神的な援助の必要性も実感しています。今まで作業療法士や言語聴覚士などのリハビリの他職種に任せていましたが、今後はバランスよく訓練に取り入れていく必要があると思います。また他職種と連携し患者様により良い環境を作っていけたらと思います。

理学療法士としての経験は5年目が過ぎました。まだ経験も浅く日々勉強が必要となりますが、日本理学療法士協会の新人教育プログラムも終了し私にとっては一区切りの年になります。今後は、専門理学療法士を目指してまだまだ自己研鑽が必要となりますが無理のない範囲でがんばっていきたいと思います。

「魅惑のバリ旅行」

医事課　福田　奈那

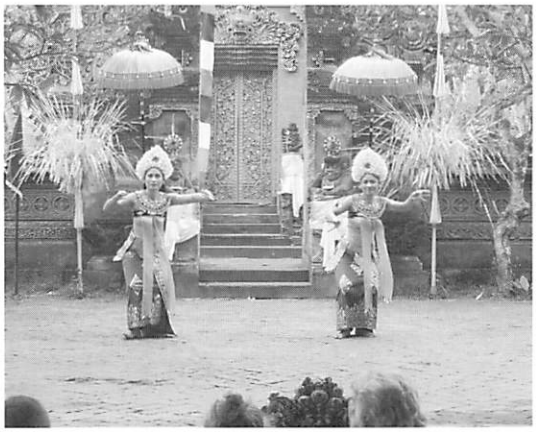
「今年の岡村病院の院内旅行の行き先はバリです。希望者は名前を書くように。」と夢のような言葉を聞いてから早2ヶ月。ようやくその日がやってきました。元来夏休みの宿題は最終日に泣きながらやるようなタイプで、事前に準備を済ませておけるような性格ではないため、出発前日はかなりバタバタしましたが、いよいよ夢の島バリへ向けて出発です。前日のバタバタのおかげで飛行機の中では熟睡していたため、あっという間の6時間で、「雪国」の「トンネルを抜けるとそこは雪国だった。」ではなく「目を閉じ、そして目を開けるとそこは南の島だった。」という感じでした。快適な空の旅に別れを告げ、飛行機を降りるとむんとした暑さ。とうとうバリに着いたのです。

いよいよ来たんだという興奮を抑えつつ迎えのバスに乗り込み宿泊するホテルへ向かいました。そしてトロピカルなウエルカムドリンクと優しい笑顔で迎えられ夢心地のままホテルの部屋へ。着いたのが夜中だったためその日は夢心地のまま夢の中へ…。

バリ二日目。この日は象に乗れ、ホワイトタイガーの赤ちゃんとも触れ合えるとい

う誘い文句に惹かれて動物園へ。きちんとしつけられているという事もあるのでしょうが象は思った以上におとなしくそしてとても優しい動物で、乗り心地も最高でした。ゆったりと軽く右に左に揺られているとなぜかとても落ち着いた気分になりました。あんなに間近で象と触れ合える機会がなかったのでとても貴重な体験でした。次はいよいよホワイトタイガーの赤ちゃんとのご対面です。小さな二頭の赤ちゃんは時間が夕方近くということもあってでしょうか、少し疲れていたようでしたがかわいらしい表情をみせてくれました。檻越しにしか見たことのなかった貴重なホワイトタイガーの赤ちゃんに触れているというのはなんとも不思議でまたとても贅沢な体験で大興奮でした。ただ興奮しつつも少し気になったのはホワイトタイガーの赤ちゃんと書いてはいるものの若干黄色がかって見える点でした。ですが電気が豆電球だからその色のせいでそう見えるのかもしれないなぁ、と思い満足感に浸りながらホテルへ帰りました。そしてホテルの部屋で衝撃の事実が発覚！！（笑）今日の楽しさを写真を見つつ振り返っていたのですが、そのなかに驚愕の事実が…！！動物園で感じた違和感は気のせいでもなんでもなく本物でした。そう、ホワイトタイガーと紹介され、看板まであったあの赤ちゃん虎はホワイトでもなんでもなく普通の虎の赤ちゃんだったのです。（笑）これには一瞬目が点になりましたが次の瞬間大爆笑でした。今年はホワイトタイガーの赤ちゃんが産まれず苦肉の策だったのかも知れないですね。それにしてもしれっとホワイトタイガーの赤ちゃんと看板に書いてあるあたりがバリっぽくてたくましいなと思ってしまいました。そして最終日にはバリ式エステを堪能。

しかし楽しい時間というのはいつまでも



続かないもので、あっという間に過ぎ去り帰国の時を迎えました。やっとバリ式の交通ルールにも馴れ（驚くことにバリでは二車線の道路に車が四台並んで走り、クラクションを鳴らして前の車に合図さえすればどんな場所でも追い越すのが普通なのです。着いた初日は命の危険を感じていましたが馴れとは恐ろしいもので二日目が終わる頃にはすっかりそれが普通になっていました。）、桁のやけに大きいルピアも使いこなせるようになってきたところだったのに…。帰国するのがとても名残惜しく、またとても素敵な時間を過ごせた旅でした。ただホワイトタイガーに関しては魅惑というよりは疑惑のバリ旅行となりましたが…（笑）しかしながら、それはそれで旅行が終わってかなり経ちますが実は思い出話の中で一番楽しい話であり、逆にあそこに居たのが黄色い虎で良かったのかもしれないな…と思ったりもしています。また出発の際、高知龍馬空港では普段飛行機に乗り慣れていないため新幹線感覚で出発時間の間際までのんびりとティータイムを楽しんでしまい院長先生に心配をかけ、迎えに来ていただくという一幕もあり、周りの皆さんには迷惑をかけましたがとても楽しい旅行となりました。是非是非また機会を作ってバリを訪れてみたいと思っています。

岡村病院 健康講座（安芸・四万十）のご案内

季節の変わり目。暑かったり涼しかったりの毎日です。梅雨入りの声ももうそろそろ聞こえ始めるでしょうか。

岡村病院健康講座、昨年は高知市で開催いたしましたが、今年は高知を東へ西へ、安芸市と四万十市にて出張講座を開催することとなりました。

高知市内のみならず、遠くから受診される患者様がとても多く、いつも来ていただく道のりを今回は私たちがお訪ねし、勉強会を開催させていただきます。

すでに安芸市（安芸商工会議所）にて、去る5月29日に**「足の痛みは万病のもと　～フットケアのすすめ～」**と題して開催し、おかげさまで盛況のうちに終了することができました。次回は7月10日14時30分より**「足の痛みは万病のもと　～検査とインターベンション～」**と題し安芸商工会議所にて、開催いたします。

四万十市には9月10月にお邪魔し、同様の健康講座を開催する予定です。

詳しい日時、場所は未定ですが、決まり次第お知らせいたしますのでご期待ください。

●ニューフェイス●

澤　田　恵　見 さん

臨床検査技師

趣味：スノーボード、旅行
食べ歩き

関　田　誠　也 さん

薬剤師

趣味：ウィンタースポーツ

岡　田　紀代子 さん

4階病棟看護師

趣味：ドライブ、旅行

よろしくお願いします。